

転倒された軍国美談

——広津柳浪「七騎落」論——

全 美 星

はじめに

広津柳浪の「七騎落」〔文芸倶楽部〕明治三〇年（一八九七）年九月は日清戦争に従軍した一兵卒の帰郷後を描いた小説だ。日清戦争終戦直後の明治二八年九月、平野三千三は大和尚山における斥候の功をたてた「七騎落の勇士」として故郷の野州松山に華々しく凱旋する。村中の歓迎会に息をつく間もなく、金鷄勲章受章は決まったも同然と持てはやされ、村一番の美人である村長の娘との縁談も持ち上がる。ところが待ちあぐねていた金鷄勲章は受章ならず、村民には爪弾きされ村長の娘との縁談も流れて「白痴人の様」になってしまふという悲惨な状況で小説は幕を閉じている。

平野三千三の不幸の原因を「行賞の時至りてつひに其の沙汰なし」〔村長は前に約せし娘を他に嫁せし〕^①めたこと、つまり、行賞

にもれ、村長の娘との結婚話も立ち消えになってしまった点に求めるのは容易である。

恩賞が将校に寛に兵卒に厳で、いはゆる一将校成つて万骨枯るといふ現象は、生き残つた兵卒にも及んだ事実を、柳浪は題材として指摘しながら、更にその点に批判を深めることをせず、むしろ褒賞を期待して傲る主人公の心理や態度に、彼及び彼一家の不幸を帰せしめようとしてゐる。ここに彼のレアリスムの限界が見られる。

（吉田精一「広津柳浪の深刻小説」^②）

吉田精一氏は、戦争後の状況を描いたものとしてその意義を認めつつも、「褒賞を期待して傲る主人公の心理や態度」に「不幸を帰

せしめ」てしまい、論功行賞の不公平さに対する批判を追求できなかったと指摘する。しかし、むしろ「褒賞を期待して傲る主人公の心理や態度」を描きあげたところにこそ「七騎落」の意義があると考えるのが本稿の立場である。「傲る心理や態度」は何に由来しているか、その背景に横たわっているものは何か、そしてそれが悲劇につながっていくものとして描かれている意味に注目する。不公平な論功行賞というものが「七騎落」一編のテーマになり損ねたのではなく、逆に、主人公の考え方を浮き立たせる素材として読めるのである。傲りと粗暴さとして現われ、ついには村民にはねつけられる三千三の考え方を追っていきたい。それがなぜ悲劇を胚胎するものとして描かれているのかを考えていく。まずは、三千三の粗暴さはいったいなぜ生じたのか、粗暴になったきっかけと過程を検討することから始めたい。

一、「軍人」という自己認識

凱旋後、すぐにもまとまって当然だと思ってお愛（村長の娘）との結婚話に進展がなく膠着状態であることに、三千三はいらだち、酒の量が増える。そんな彼が激怒するのは、「結婚は勲章をもらってからの話だ」と思われていることを知った時である。

お霜（三千三の母親——引用者注）は善右衛門から聞いたお

愛についての藤井（村長——引用者注）の意中を話した。三千三は着々顔色を変へて、眼は血走った。

「悪気あるでねえからな……。」

「失敬極つた——勲章や年金を見てからなんぞと……。」と、三千三は猪口を膳の上へ投出し、「乃公おれを疑つてるから、其様そんな——軽蔑しきつた事を……。」と門口の方を見返つて、怒気天を衝くの勢である。（一八）

結婚は受章が決定してからだという考え方に激しく反応しているわけであるが、三千三自身、金鶏勲章受章を確信しているにも関わらず、なぜここまで猛烈に怒り、荒れ出すのだろうか。

三千三は帰郷後も郷里の人々の野州方言とは異なる兵士の言葉遣いを継続して用い、人の前に出るときは必ず軍服を着ている。そして戦争が終わった今でも、繰り返し自身を「軍人」と称し、信頼に足る者だという誠実さや特別さを主張する根拠として「軍人」という言葉を用いている。これらは帰郷直後からほぼ一年が経過した小説の結末まで変わらない。

「いや、お世辞は云はん、軍人ですぞ」（五）

「軍人たる自分を疑ふとは……失敬にも程のあつたものだ。」

（一八）

「遼東の野に馳聘して、銃剣に功名を博した手に、鋤鍬なぞを持つて馬鹿々々しい真似がされるものか。」(九)

「鋤鍬なぞを持つ」つのが「馬鹿々々しい」と言っていることは、単なるおごり高ぶりというより、自分はもう農民ではなく「軍人」であるという認識のためである。それは、彼が徴兵された七年前に東京に出て「軍人」として訓練・教育され、日清戦争という実際の戦闘を体験することで強化されてきたものだ。

「家柄も何もあるもんかね。藤井だと云つても、身代が好いと云ばかりで、村長にも選ばれてるんだが、其身何の功も一人に誇られる程の功を立てた事はあるまいぢやないかね。家柄ばかりで威張れる世の中とは違ふよ。」(四)

「お愛との結婚話は——引用者注）其様に有難い事もないさ。だから家柄も由緒もあつたもんぢやない」(四)

そしてこのような発言からは、自分は村のどんな「えらい」人間とも異なる、区別された存在だと考えていることが明らかになっている。自分が国のために「功を立てた」「軍人」であり、それはそれ自体で全てを上回る価値と名誉を持つ「尊」いことだという認識である。古い時代に評価された「身代」「由緒」「家柄」などではな

く、新しい時代の最も価値あるものを獲得したと確信する。だからこそ、出征以前は考えられなかった富裕な村長の娘、村にはめずらしい美人のお愛との結婚話も「そんなにありがたいこともない」と考えるわけだ。このように、三千三が「軍人である」自分に絶対的価値を見いだしているのに比べ、村民たちはどうであったのだろうか。

二、村民との齟齬

数々の歓迎会で示された村民の態度は、一見すると三千三の認識と変わらないように見えるが、実は、最初からそれは完全に異なるものであった。

お愛を三千三の嫁にとは、元来藤井の発意ではなくして、実は善右衛門が三千三の為を謀つたので、藤井にも其心がないではないが、それは三千三が功何級にか叙せられ、勲章を授けられ、年金を賜はつた上の事にしたいと云ふのである。善右衛門も此には同意で、お霜も道理至極の事と思ふので。(中略) 三千三へは云はぬが可からう。云ひ様と聞き様では、下墨まれる様にも思はう、不快にも思はう

凱旋直後に持ち上がった村長の娘お愛との結婚話は、実は藤井

(村長) が自ら持ちかけたのではなく、善右衛門(三千三や三千三の母お霜と懇意な村人) が三千三のためを思って言い出したことであり、さらに、村長の(金鶏勲章を待つ)ということに関しては、善右衛門も、そして母親でさえも当然だと納得しているのだ。そして、二人は(金鶏勲章を待つ)という自分たちの考えが三千三の激怒を買うであろうことも予測している。つまり、自分たちと三千三の考え方の違いを明確に認識しているのである。三千三に最も近いこれらの人々さえも、三千三とは異なる考えを有している。三千三は、自分の戦功を疑われた、軍人である自分を疑ったと激怒するが、そもそも村民たちにとって価値足りうるものは、それが本場に「戦功」だったかどうかということではなく、三千三のはたらきが金鶏勲章によって「戦功」と称されることである。戦功は金鶏勲章にながってこそ、社会で通用する価値になり得るのだということだろう。戦功そのものの価値を確信する三千三とは完全に異なっている。三千三が金鶏勲章を自身のはたらきの結果的なものとして当然視し、既に確定した戦功という価値に附属するものとして考えているのに比べ、三千三を除く村民は、(金鶏勲章を受章)し(年金を受取る)ことができ初めて価値あることになると考えているのだ。次の引用は順に、三千三の母、善右衛門、そして三千三の言葉である。

百姓は百姓だけの業と云ふものがある。それを勉めねばと、折々お霜が三千三を勧めては見たのであるが、三千三は耳にも掛けなかつた。(九)

お上から御沙汰のあつた上は、三千三の云ふ通りにするも可いが、此頃の様な心持で居られては、老年の母が困るばかりではない、自分なぞも世話甲斐のない話だ。一番意見を云つて遣らうと、懇々理を尽くしたけれども、更に其甲斐がないので、藤井からも云つて貰つたが、此さへ用ゐなかつた。(九)

大名眷の大勇士とは乃公だ。国家に尽くした戦功を思ふならば、自分等親子二人は村費で賄つても可いくらいなものだ。自分の様な勇士が此村から出たばかりで、松山と云ふ地名が、始めて世の中へ知れた位なもので、村に対しても恩人と云つてよいのだ。(九)

戦功に関する見方だけでなく、ここにも、それぞれの考え方の違いが示される。農事を全く顧みない三千三に対し、周囲の人々は「百姓は百姓だけの業と云ふものがある」のに「それを勉め」ない「此頃の様な心持」を改めるように「懇々理を尽くした」とある。しかし、三千三自身は自分は既に「大名眷の大勇士」であり「百姓」ではないので、それをつとめる必要はなく、よって、彼らの言葉は「理」ではないと受け取っている。むしろ「自分等親子二人は村費で賄つ

でも可いくらい」であるのに、依然として、元の生業に携わるよう言われることに納得できず怒り心頭なのである。

金鶏勲章受賞後の結婚という考え方に激怒したのはなぜかという問題点に帰ってまとめよう。三千三は、村長のその思惑を知ったとき、「軍人」「大勇士」としての自分を実は全く認めてもらっていない、区別されていないことに初めて気づいたのである。「百姓」が農事を放棄することにあきれかえる立場と、「軍人」である自分を、村人が彼ら自身と区別しないことに憤る立場は相通じることができない。三千三と村民の価値観の違いは確実に存在し、その齟齬は時が流れるにつれて、より明確になってくる。三千三はますます粗暴になり、よって村民はますますあきれはて、だから三千三も一段と荒れて、という悪循環に陥ってしまうのだ。

三、金鶏勲章の無力さ——「梅檀橋」という手がかり

三千三と村民の齟齬を見てきたが、もし三千三が金鶏勲章を受章していれば幸せな結末となったであろうか。ここで、注目しなければならぬ重要なことがある。

人を見れば誇つて居た。気も漸次荒くなつて、一言でも言葉を返す者があると、直ぐに喧嘩仕掛で、乱暴の限を尽くすので、前には戦功者として村に尊敬されたのが、今は指弾されて相手

にする者もない様になつた。(九)

これは論功行賞の結果が未だ発表されていないときの状況である。しかしながら、すでに三千三はその粗暴さ故に村民に突き放され「指弾」されている。悲劇の原因を単に金鶏勲章に漏れた点に帰することは短絡的すぎる。村民に「指弾されて相手にする者もない様」になつたのは、論功行賞の結果が出る以前からだったのである。

柳浪の小説に「梅檀橋」(「新小説」明治三十六年(一九〇三)五月)がある。広津柳浪のどの作品集にも所収されず、現在では全くと言つていいほど知られてない小説だが、この二つの小説を併せて考えることが、悲劇の根本を探るのに非常に有効に思われる。というのも、「梅檀橋」でも、やはり農民である主人公が日清戦争に出征し(三千三と同様、騎兵)「名誉の軍人」となって凱旋したという設定になっているからである。二つの小説の異なる点は「七騎落」が金鶏勲章を受章できなかった人物を、「梅檀橋」が金鶏勲章を受章した人物を描いているという点だ。しかし興味深いことに、どちらも主人公は戦後幸せな一生を送るとはならず、悲惨な結末に終わる。金鶏勲章受章者かそうでないかという雲泥の差の境遇にいる人物設定だが、先走つて言うと、実は二つの悲劇には共通の原因が存在する。

「梅檀橋」の舞台は、肥前の国田代在西酒井村で、時期的には日

清戦争の三、四年後である。主な登場人物は、従軍していた大太郎、その妻お浅、そしてお浅の元許婚の仙蔵である。

(大太郎は——引用者注) 其頃までは、家道尚ほ衰へず、数町歩の収穫はあり、戦功の勲章に添うた年金はあり、同胞とても無き男一人、一生寝て為ても富裕に世を送らるゝ身の上、村一番の果報者と羨まれもしたのである。其上、村一番の美婦、既に仙蔵と呼ぶ結髪同様の男を振捨たお浅と云ふに、女の方から思込まれて、其を妻に迎えたのも亦、随一の果報者として羨まれて居た。其頃の大太郎は其身にも不足と思ふ事なく、極めて楽き平和の生活を続けて、お浅に村一番の美服を着せ、自分は騎兵の制服を穿つて、村一番の誇りと思つて居たのであつた。けれども、此平和も楽みも、僅か此三四年以来、忽ち一変して、今では住む家も形の如く荒れ果て、田地も大方は人手へ渡して、残れるは彼軍服とお浅と馬との三つになつて了つた。村一番の美しき妻は村一番の寡れ様で、村一番の果報者は村一番の憎まれ者となつて了つた。(三)

大太郎は、日清戦争に出征し、その戦功を認められ金鷄勲章を受章する。村に戻った彼は村民たちに熱狂的に歓迎され、村一番の器量よしとされるお浅は彼に惚れ込み、許婚同様の仙蔵を振り捨てて

嫁入りする。ところが、大太郎は、戦後三、四年間に、家産を失い粗暴になっていく。その結果、彼の馬は「人食い馬」と言われ、「村一番の果報者は村一番の憎まれ者」になってしまふ。そのように大太郎が荒んだ理由は、酒色と博打であると語られるのだが、しかし、彼が粗暴になった背景にはもう少し微妙な、しかし決定的な問題が存在した。三千三と同じように村民や家族、彼の場合は特に嫁のお浅との齟齬である。

お豊(大太郎の情婦——引用者注)には情夫があり、情夫と共に台湾とかへ行つて了つた時には、既に大太郎が妻は寡れ果て、その身は村人に指弾きされて居るのであつた。

その後の大太郎は即ち今日の大太郎で、妻へ対しても、村人へ対しても毎に嫉妬の眈を凝す様になつた。村人は以前大太郎を羨んだ時の様には珍重せず、妻は時に愚痴を列べる事もあり、時には口答をする事もあり、一方には仙蔵が村一番の正直者として、村人の総に可愛がられ居るので、お浅の心が或ひは傾いて居りはせぬかと大太郎は毎に安からず思ふのであつた。

(三)

博打や酒色に陥つた大太郎が、酌婦に逃げられたのちも、暮らして心情を立て直せなかつたのは、農業には戻れないという自己認識

及び、村民が自分を珍重せずお浅の元許婚だった仙蔵を評価したと、お浅まで仙蔵に気持ち移ってしまったことを感じ取っていたからである。よって、粗暴さが増し、村民にはますます爪弾きされるという「七騎落」三千三と同じような悪循環に陥るのである。結局、村民は村の中で農民であり続けた仙蔵を評価し、いくら戦功を立てて勲章を受章しても、農民らしく振舞わない（農民）の大太郎を決して許さないのである。

「梅檀橋」「七騎落」の村民は、大太郎や三千三が凱旋した直後は熱狂しているも、その裏面では、彼らの「軍人」という自己認識を受容していなかった。そして、それに憤る主人公達の粗暴さが増してくると、戦功をたてた者であろうが、金鵝勲章を受けようが受けまいが、誰も相手をせず嫌悪し爪弾きするのである。戦功というものの、さらにその価値を確定したはずの金鵝勲章さえ、大太郎や三千三の郷里では、彼らが考えていたような絶対的価値にはなっていないのであったのである。

四、行き場のない自己認識

(一) 新しい価値としての「戦功」

「七騎落」冒頭で、戦争から凱旋帰国した平野三千三の年齢が「二十七歳」に設定されている点に注目したい。「私が東京へ出る時——七年前だったが」と振り返っていることから、三千三が故郷の

野州松山から東京へ出たのは二〇、二一歳の時で、それは兵役のためだと推測できる。当時の徴兵期間は三年なので除隊した時、彼は二三歳頃であったはずだ。ところが、日清戦争が勃発し出征したのが明治二七年（彼の年齢は二六歳）なので、その間には三、四年のブランクがある。東京へ出た七年前から今回凱旋帰国するまで故郷の状況に疎い様子から、この期間中、三千三は帰郷していないと推測できる。それでは、除隊後から戦争が始まるまでの三年間、三千三は東京で何をしていたのだろうか。小説にはこの間の事柄は何も書き込まれていない。どういう目的で、どのような生活をしていたのか全く知り得ないが、徴兵のため東京へ出てきたので、同時代の地方から上京してきた多くの青年達のように、東京に出てきた機会を生かし、出世の可能性を探っていたかもしれない。ところが小説には何一つ言及されていないことから、特にこれと言った活動がでななかったという設定であろう。若い二〇代の数年をそのように無為に過ごしてしまった状況で戦争が勃発したのである。出征した一人息子を心配して悶死してしまった父親の考えとは裏腹に、青年三千三にとっては、戦争はまさにタイムリーで貴重なチャンスとして認識されたのではないだろうか。

明治に入ると、身分や出自に関係なく立身出世の可能性がある社会だと考えられるようになる。青年たちは大学を卒業し学士になることや実業を通して裕福になるなど、立身出世に夢を馳せた。しか

し、それもやはり、そもそもある程度の経済的余裕などがなければ成し遂げられない限られた可能性であったことは否めない。そして、たとえ事業を始めても学士になっても思ったようには成功できないと気づき始める。そのように立身出世への夢が先細りしてゆく状況下、日清戦争を機に「戦功」というものが社会に通用する新しい価値として浮上してきたのだ。出征し、戦功をたてることでできればという庶民も可能な条件だった。経済力がなくとも、学歴がなくとも、農民出身であろうとも、戦地で勇敢に戦えば誰でも得られる可能性があった。徴兵は義務であり、生命の危機と向かい合わせの日々を送らなければならなかったが、結果的に、庶民の男性にとっては、それまで思いもしなかった「戦功」「名誉の軍人」という地平が開かれてきたわけである。

そして、実際に〈庶民勇士〉が誕生した。例えば「安城渡し」の戦闘「の喇叭卒木口小平や、「勇敢なる水兵」三浦虎次郎、「平壤玄武門一番乗り」の原田重吉らである。彼らは各種軍国美談の英雄として脚光を浴び、新聞、雑誌などのメディアをはじめとし、錦絵、パノラマなどでも取り上げられ、朝顔人形になるまで大人気を博した。⁴⁾

「東京市中にても近來時事的流行詞あり、何事にもちよつと手柄になれば、金鵄勲章受け合いと云う事などその一例なる」という新聞記事からも、金鵄勲章というものがいかに注目されたかがうかが

える。兵卒の場合は功七級と事実上決まっていたが、当時一般庶民も対象に加えられた唯一の勲章である。「将来武功拔群ノ者二授与」（金鵄勲章創設の詔）されるという金鵄勲章は、建前としては栄典大権で庶民と天皇が直接結びつく名誉の象徴であると共に、さらに年金という一生の生活の保証がつき、名誉と経済的安定を同時に手にすることができるものであった。加藤聖文「ある「国民」兵士の誕生」（松山幸夫編著『近代日本の形成と日清戦争』二〇〇一年）は、次のように述べている。

戦場からの凱旋は、ただ一人「馬上」にある自分をすべての村民が仰ぎ見る存在へと昇華させる。（中略）各町村で行われた戦争体制への積極的な協力は、戦死者、さらには生きて還つてきた兵士の村落での地位を必然的に高める結果をもたらし、「凱旋兵士」（多くは「勲章」によってより具体的な価値が付与されることになる）という名誉は封建的な身分制が色濃く残っていた村落のなかで、唯一既存の身分制を超越できるものとなつていく。

そして、こうした「凱旋」が社会変革の一部分として欠くことのできない要素となった時、近代日本における軍隊は一種の身分制打破の役割を担うことになり、そこに軍隊が民衆に支持される基盤が形成されることになるのである。⁵⁾

戦功が勲章によってより具体的に確定し、一般庶民にも「既存の身分制を超越できる」可能性をもたせたと指摘する。

(二)「えらい」という皮肉

新しい価値として浮上したとされる戦功だが、それに対する庶民の認識を、柳浪はどのように描いたのだろうか。三千三の戦功に関して、冒頭では「えらい」という言葉が繰り返し用いられ、ことごとく傍点が付されている。しかし、これまで見てきたとおり「えらい」という言葉で表現された三千三の戦功が、彼の郷里においては、真に「えらい」ものではなかったことが「七騎落」には描かれているのである。金鷄勲章に象徴される「戦功」というものが、一時は脚光を浴び羨望と讃美の対象となったが、その熱狂は一過性のものに過ぎず、戦後の興奮が次第に冷めてくると同時に、実は戦功を絶対的価値として受容していなかった庶民が多く存在したことが描かれるのである。本文中の度重なる「えらい」には強烈な皮肉が読みとれる。

そもそも題名の「七騎落」だが、謡曲に「七騎落」というものがあり、大よそ次のような内容である。石橋山の合戦に敗れた頼朝一行は、落ち延びる人数が八騎であることに気づく。これは、祖父為義や父義朝が落ち延びたときと同じ人数であり、不吉な数なので、一人残すことにする。結果、親子で従っていた土肥実平・遠平のう

ち、息子遠平が残ることになる。そこへ追っ手が現れて、遠平は討死をする。しかし、後で和田義盛の軍勢と出会ったとき、討死したと思われた遠平は和田によって助けられていて、土肥親子は再会に涙し目出度しとなる。

柳浪の「七騎落」が想起させる謡曲「七騎落」のイメージは、果たして戦功にふさわしいものなのだろうか。三千三の戦功は「玄武門一番乗り」など、いかにも戦功らしい華々しいものではなく「七騎落の勇士」である。そもそも「戦功」といわれるものが、言われるとおりのものであったかというのは戦闘に参加した者しか分からない。そして銃弾が雨のように飛び交う中では、当の兵士たちでさえきちんと把握できなかったのかもしれない。「戦功」に対するゴタゴタは、軍や警察、或いはメディアの操作により、不要な部分は捨象され重要な点でさえも改竄され、クリアーな「軍国美談」として定着させられたのである。三千三は自身の働きを「戦功」だと確信した。そして、それは彼が考えていたように確かに金鷄勲章受章に値するものだったかもしれない。しかし、それを疑っている人物が小説の冒頭で既に描かれているのである。三千三の「大和尚山の斥候」「金州城の要害見抜いて来た」戦功は、冒頭の商人によって「斥候に行った騎兵が敵に取巻れて」「六人か七人で敵の中を逃げて来た」だけだと言われてしまうように、第三者には、単に「逃げた」と取られてしまうこともある。三千三の働きは彼の自負・事

実に関係なく、そもそも疑われる戦功「七騎落」の勇士として設定されているのだ。

(三) 元兵士たちの行方

三千三がお愛との結婚を切望した理由は、単に富裕で美しい妻を娶ることができるということだけではなく、彼女が都会で近代的教育を受けたことに対する期待であったと言える。

「貴女は宇都宮で教育を受けた人だから、軍人の尊むべき事は、知つて居なざる筈だ。」(八)

つまり、田舎の人間に「軍人」「戦功」の価値が理解・受容できなくとも、新教育を受けた彼女だけは「軍人の尊むべき事」を知っているはずだと考えたのだ。お愛に「貴女は軍人を愛しますか」(八)と迫る三千三の姿には、軍人としての自分の価値を認めることのできる人物に対する期待が示される。しかし、彼女は結局他の人物に嫁いでしまう。近代的教育を受けたお愛さえも、「軍人」「戦功」に、三千三が確信していたような価値を見いだしてなかったことは明らかである。それらは、三千三にとって決して許すことの出来ない「軽蔑」であるとともに、到底受け入れることのできない事態であっただろう。

さらに、「梅檀橋」では、軍人であることや戦功というものを、一時的にしる、全てを上回る価値として認識したことを「罪」とまて言っている人物がいる。それは、ほかでもない主人公大太郎の妻・お浅である。仙蔵とお浅への嫉妬で半狂乱状態になっていた大太郎は、彼らを追いかけて馬に乗ったまま、古くなった「車馬禁止」の「梅檀橋」に乗り入れるが、結局人馬ともに川に落ちてしまう。不可解な点は、大太郎に愛想を尽かしているお浅もそのあとを追って川に身を投げたということだ。

お浅は辛さうに顔を背向けながら、「仙蔵さん、もう何事も云つてお呉れでない。彼時お前さんを袖にして、大太さん処へ嫁入しやしたは、自分が一生の失敗だつたと、今日になつて思当りました。」(二)

「いゝえ、自分の罪が自分に報つて来たのですから、私はもう諦めて居ます。」(二)

「一生の失敗」「自分の罪」ゆえの悲劇だとお浅は言っている。「罪」と言う言葉が直接的に指すのは仙蔵を裏切り大太郎に嫁いだことであるが、凱旋直後の大太郎の「勇ましき様」と「戦功」に価値を置き、そちらを選択してしまったことをも含んでいる。お浅の認識では、それは「一生の失敗」「罪」であり、その報いは「死」だった。

華々しい凱旋を遂げ、それが身分制を超越できるほどの価値であると認識していた元兵士達が、帰郷後、郷里の人々との決定的なズレに苦悩し、三千三や大太郎のように粗暴になっていった事實は意外に多く存在し、例えば生方敏郎『明治大正見聞史』では「幸い無事に凱旋した兵士の中には、二年間の軍隊生活に馴れ鋤鋤取することを忘れるまでに百姓の仕事に遠ざかっていたために、帰郷して再び農事に従事するのを厭う者も出来た。帰郷してあまりの歓迎を受け振舞酒に酔い浸り、村人には持ち上げられ女にはモテるところから、酒色に身を崩すに至った者もあり、気位が高くなり粗暴になって妙になってしまう者も出来た」とある。また、高倉徹一編『田中義一伝記・上』にも「一面に於ては、郷里に帰った兵隊が、「兵隊上がり」と云われて郷党に嫌われ恐れられる事実が多々あった。嫌われ通しで、遂には無頼の徒となる者も必ずしも少ない数ではなかった。戦勝に驕る場合、特にそうした例が頻出するのも当時の状況上、なかなか矯正が困難であった」という戦後の状況を確認できる。

五、転倒された軍国美談

凱旋兵士は、栄光の日を心ゆくまで追憶するいとまもないまま、平凡なる一「地方人」としてあらためて出発せねばならなかった。

(大濱徹也編著『近代民衆の記録 8 兵士』¹⁰⁾

しかし、平凡なる一「地方人」に戻ることがいかに難しい構造になっているかが「七騎落」には描かれている。「七騎落」の悲劇は、行賞にもれたことやその不公平さだけでなく、「国民兵士」として出征した地方の農民が、戦争を通して「軍人」という自己認識を抱き、戦後、〈農民〉〈村〉という枠組みには戻れない、戻れなくされてしまったという構造的な問題による。さらに、彼が確信した「戦功」という価値はそれまでの村の論理を超越するものでもなかった。金鷄勲章を受章できなかった三千三の悲惨さと、受章した大太郎の悲劇は同じ原因に基づく。柳浪が「七騎落」で描いたものは、今や農民に戻れない、「軍人」という自己認識を有する元兵士(庶民勇士)たちの落ち着ける場、受け皿が戦後の明治社会に存在しなかったことによる悲劇なのである。戦功という価値は、結局、幻に過ぎない。この先、三千三と彼の母親を待ちかまえている絶望的な生活を予想させることによって、廃人同様になってしまった三千三を作り上げたシステムを痛烈に批判しているのである。そして、当時の「七騎落」に対する批評は、それを確実に読みとっていた。

生ける人の幾多を精神的死境に沈淪し埋却するの事実多し。思想の衝突遭遇の変遷に依りて命運の悲惨を生ず。絶好の詩料此

間に潜在す。柳浪子材を此に採る採り得て佳なりといふべし。山深き水遠き処の村郭に於ても従軍の兵士の上には必ず一箇人生問題に資すべき身世を有す、三十三の如きは蓋しその一なり。

(浩々歌客「青眼白眼」「国民之友」明治三〇年(一八九七)一〇月)

負傷兵だけでなく、元兵士たちすべてが、戦後社会の価値観と自身の考え方の相違に直面した結果、精神的廢兵となってしまう危険性が三十三の姿に具象化される。

「七騎落」は、母一人子一人の家庭でそのたった一人の息子が戦地で戦い功を立てて凱旋するという、一見、軍国美談の典型的な構造を踏襲しているかのように見える。しかし、読み込んでいくと、実は、父親は息子を戦地に送ったことに絶望して悶死し、本人は名誉も愛もなくし、年老いた母親との生計もたてられない暗澹たる未来が描かれ、軍国美談という構造は完全に転倒させられている。

日露戦争後の「日刊平民新聞」では、「戦後の軍人」と題する連載ものを毎回数三件ずつ二〇回に及び掲載している¹¹。それらには、元兵士たちが博打・遊廓・酒・詐欺・強盗・暴行などを行い、荒んでいるさまが報道されており、日露戦争後も、戦後の軍人の粗暴さや墮落が大きな社会問題となっていることを窺わせる。日清戦争当時には、従軍者の数が日露戦争に比べると比較的少なかったことも

あり、それほど表には現われなかったが、「七騎落」「梅檀橋」では、日清戦争時に既にそのような事態が生じていたことが拾い上げられ、軍国美談を逆転させたかたちで描かれる。「梅檀橋」大太郎の、戦後三、四年たった今でも、田畑が広がっている村の中を、色あせた軍服を着、馬を乗り回しているという異様なさまは、「軍人」という自己認識を抱かせられてしまい、しかしそれが戦後の社会に通せず、行き場を失った元兵士たちの悲劇を訴えてあまりある。

六、終わりにかえて——柳浪小説の批判意識

これまで考察してきた「七騎落」を、戦争の後遺症を扱った反戦小説とみなすことは可能だろう。ところが、この時期に書かれた柳浪の他の小説を見ると、必ずしも反戦的とは言えない上に、「非国民」(文芸倶楽部)明治三〇年(一八九七)一月のように一見すると、むしろ思想的には国家主義に近いと読める小説もある。このようなどちらともつかない柳浪の戦争小説の書き方は、日露戦争を扱った小説、例えば『貯金玉』(三民剣 明治三七年八月)、「昇降場」(「ひしほ」明治三八年三月)等にも共通し、複雑で矛盾するスタンスが示される。よって、これら戦争を扱った一群の小説から、柳浪を反戦小説作家、或いはその反対で戦争に賛成した作家だなどと断定することは困難であり不毛でもある。「柳浪は思想の人ではない¹²」という先行研究の見解もこのような柳浪小説のあり方を踏まえたも

のであろう。

しかし「七騎落」に見られるような批判意識自体は、多くの小説に確認される。戦争に対する賛否という視点ではすくなく取れないとすれば、それはどのような枠組みでとらえられるのだろうか。まずは、次の言及を確認しよう。日露戦争時の明治三十七年八月「文芸倶楽部」における「文士の戦争観」特集で柳浪が語った内容である（柳浪の回は「社会主義と際物文学」という題名）。

一体戦争を主題とした文学に、傑作が出ないとか、戦争文学は際物文学だなど、云ふ人もあるやうですが、今日順境にある文学に碌なもの、出来る筈がありません。戦をすれば勝つ、勝つ戦を唄ふのだから、或は貧家の夫が出征するに臨んで、其の妻が髪を剪つて鬚けたとか、親父が戦死したと云ふ号外を見て、その子は万歳を唱へたとか云ふやうな趣向に落ちてしまつて、まづ千篇一律になつてしまふのです。

戦争文学の「千篇一律」を排し、個性を發揮すべきだと主張する文学者としてのプライドが読み取れる。その意味では「七騎落」「梅檀橋」等は、一兵卒の戦後、精神的負傷とも言うべき状態を扱い、独自の問題意識を形象化できたと言えよう。

しかし、「七騎落」に現れる厳しい批判意識は、単に「千篇一律」

否定のみならず、根本的にはやはり柳浪の明治認識に関わる。それは一言で言うならば、反「明治の理念」とでも言えるものだ。

先にも言及したが、「七騎落」の半年前に発表された「非国民」を参考に考えてみたい。この小説では世界（平和）主義者と国家主義者の対立の様相が描かれ、世界主義者の方が一時優勢になるが、終局には思想界から追放され、それに伴い許嫁にも捨てられ、国家主義者の勝利に終わっている。注目すべきは、世界主義者の人物像に徹底した戯画化が施されると同時に、国家主義者の方にも、その思想がいかに感情的で非論理的であるかが書き込まれている点だ。

「非国民」における真の勝利者は、世界主義者あるいは国家主義者のいずれかではなく、それら思想対立の枠外に存在し、どの思想も自分のものとはしなかつた人物（世界主義者の許婚）である。⁽¹³⁾

「非国民」の例を挙げたが、明治になって移入された新しい理念や思想に対し、柳浪小説は概して非常に懐疑的である。それら理念や思想は、実際の人間関係や社会に有効なものでもなく、本質を説明できるものでもないという認識がうかがえる。その意味では広津柳浪は（明治の新しい思想の（有効性を認める）人ではない）のだ。「七騎落」では、明治近代の新しい価値の一つとして浮上した「戦功」が取り上げられた。農村出身の自身にも開かれたものとして「戦功」の価値を確信する人物を作り上げ、しかし、出自や身分を乗り越えるには全く無力であるさまを描き、終局には悲劇的な結末を用

意したこの小説にもまた、明治に新しく台頭した価値や理念に対する深い不信任が書き込まれていると言えよう。

注

(1) 「柳浪の『七騎落』」「早稲田文学」明治三〇年一月三日

(2) 吉田精一「広津柳浪の深刻小説」『自然主義の研究』東京堂

一九五五年 九四頁

(3) 実際に、日清戦争後帰郷した元兵士たちが、彼らの郷里の方言ではなく出征中に用いた軍隊式の言葉遣いをしたことが、以下にも言及されている。

「兵士は軍服を着、剣を吊ったまま、懇意な家々を挨拶して廻った(中略)兵士は言葉までも「けれども」と普通いところを「けれどもが」とがの字を余分に付け、「しなきゃならない」という場合に「せにゃならぬ」と言い、(中略)私たちの地方(群馬県沼田町——引用者注)で聞いたこともない言葉に変わり、漢語を非常に多く交せて語った」(生方敏郎『明治大正見聞史』一九二六年、引用は中央公論社 一九七八年 四五—四六頁)

(4) 巷で旋風を起こした庶民「勇士」達が、教科書、詩、絵草紙、芝居等に取り上げられた一例を以下に挙げておく。

①教科書

「安城渡しの戦闘」の喇叭卒、木口小平については、『尋常小学読書教本』巻七(明治二七年)に、当時は白神源次郎として取り上げられ、

明治三七年には国定教科書である『尋常小学修身書』にかの有名な「シデモ ラッパヲ クチカラハナシマセンデシタ」という部分が見られる(西川宏「ラッパ手の最後…戦争の中の民衆」青木書店 一九八四年に詳しい)。

②新体詩、芝居

「平壤玄武門一番乗り」の原田重吉(明治二八年一月二六日金鶏勲章受章功七級)は、新体詩「原田の武勇」(福羽美静「読売新聞」明治二七年一月一〇日)、また、芝居「海陸連勝日章旗」(歌舞伎座、明治二七年一月 福地桜痴作)などで題材とされた(岡本綺堂『明治劇壇 ランプの下にて』岩波書店 一九九三年初版は一九三五年)二〇三頁)。

③絵草紙屋

「絵草紙屋」まだそういうものが沢山に残っていたが、そこには、松崎大尉戦死の状態だの、ラッパを口に当てる艶れた喇叭卒だのの石版画がこてこてと色彩強く並べて見られた。(田山花袋『東京の三十年』大正六年(一九一七)六月 引用は『明治文学全集九九 明治文壇回顧録(二)』筑摩書房 一九八〇年 一二二頁)

④朝顔人形

「国民新聞」明治二八年六月三〇日付けには、「朝顔の本場なる入谷」で「朝顔人形」の「看覧場」を設置したこと、「玄武門先登の重吉」人形もこしらえられる予定であると報道されている。

(5) 「毎日新聞」明治二七年一月一八日

(6) 加藤聖文「ある「国民」兵士の誕生」松山幸夫編著『近代日本の形

成と日清戦争」雄山閣出版 二〇〇一年 四一二頁

(7) 野々村戒三編・大谷篤蔵補訂『謡曲二百五十番集』一九七八年七月四二三頁等に所収されている。

(8) 前掲 生方敏郎『明治大正見聞史』四八頁

(9) 高倉徹一編『田中義一伝記・上』田中義一伝刊行会 一九五八年 三七一頁

(10) 大濱徹也編著『近代民衆の記録 8 兵士』新人物往来社 一九七八年 八四頁

(11) 「日刊平民新聞」(明治四〇年一月二二日)三月一六日)に「戦後の軍人」と題され、毎回数三件ずつ二〇回に及び掲載された。日露戦後、軍人の博打・酒色・詐欺・窃盗・暴行・殺人などが報道されている。以下に一例を挙げる。

①勲章に対しても 和歌山県下の帶動者中には「己れは日露の戦役で勿体なくも金鷄勲章動何等といふ肩書をもったものであるから今更ら勲章に対して、も従来のに如に家業に精を出す事が出来ない」などと威張り働かざるもの甚だしと、勲章に働かざる権利が附属せるものと見へたり(明治四〇年一月二四日)

②秋田県南秋田郡柳原寅太郎は三十七八年の日露戦役に従事して勲八等瑞宝章一時金八十円を下賜せられし程なるが去る十六日同町の栗山清藏外二名と博奕を為して警察へ引れたり戦争と云ふ大賭博は名譽なるも賽の目を転がす小賭博は不名譽と覚えたり(明治四〇年二月二日)

③放火軍人 埼玉県児玉郡児玉町の田島大三郎同繁蔵と云ふは何れも勲八等瑞宝章被下賜の軍人なるが酌婦を口説いて肘鉄砲を喰はされし口

惜し紛れに群馬県倉賀野町飲食店大谷ハナ方に放火して高崎警察署に拘引さる(明治四〇年三月八日)

④帶動泥棒 愛媛県宇和島古町安田満と云ふは同地本町掛木長助方にて金六十一円を窃取したる事露顕して去る六日裁判所に送られたり此れが卅七八年役従軍勲八白色桐章一時金二百円被下賜の軍人とは呆れたものなり(明治四〇年三月二日)

(12) 吉田精一「第三部 観念小説と深刻小説」(『自然主義の研究』東京堂 一九五五年)。このような見解は、早くは福田清人「明治文学研究(一)」(『硯友社の文学運動』山海堂出版部 一九三三年)にも見られ、吉田精一の後は、森英一、坂本育雄らによっても指摘されている。

(13) 詳しくは拙論「広津柳浪「非国民」論——感化される者／されない者」(『阪神近代文学』第4号 二〇〇二年二月)を参照されたい。

※本文の引用は次の通りである。

「七騎落」——『柳浪叢書・後編』博文館 明治四三年(一九一〇)六月

「梅檀橋」——『新小説』明治三六年(一九〇三)五月

※引用に際して、旧字体・旧仮名遣いは適宜新字体・新仮名遣いに改めた。